

「オーガストウォーズ」 ★★★

2013（平成25）年7月3日鑑賞
＜GAGA試写室＞

監督：ジャンク・ファイジエフ

クセーニア（チョーマの母親、シングルマザー）／スベトラナ・イヴァーノヴナ

ザウル（平和維持軍の軍人、クセーニアの元夫）／エゴール・ペロエフ

リョーハ（ロシア軍の偵察部隊の指揮官）／マクシム・マトヴェエフ

チョーマ（クセーニアの一人息子）／アルチョム・ファジェエフ

エゴール（クセーニアの恋人、エリート銀行マン）／アレクサンドル・オレシコ

2012年・ロシア映画・132分

配給／ブロードメディア・スタジオ

＜オーガストウォーズ（8月戦争）とは？＞

今年も7月に入ると、またそろ8月15日の終戦記念日に向けて安倍総理の靖国参拝があるのかどうかをめぐって中国からのきな臭い動き（？）が少しずつ見えている。しかして、あなたは「オーガストウォーズ」（8月戦争）、別名「ロシア・グルジア戦争」を知っている？かつて、「ソ連」というアメリカに唯一対抗しうる「大国」があったこと、それがゴルバチョフ書記長のペレストロイカ政策によって結果的に解体され、現在の「ロシア」が生まれたことは近年の大きな歴史の流れだが、その後1991年から1992年にかけて「南オセチア紛争」が発生し、さらに2008年8月7日から16日の間ロシア・グルジア戦争が起きた（これを「南オセチア紛争」と呼ぶことも多い）わけだが、そんなことを詳しく知っている日本人はほとんどいないのでは？

本作はそれをテーマとした映画だが、実は主人公は美しい人妻クセーニア（スベトラナ・イヴァーノヴナ）。そして、ロシア軍がその製作に全面的に協力した本作には、T-72戦車、Mi-24ハインド攻撃ヘリコプター、スホーイ25戦闘機などの本物のロシア軍兵器がたくさん登場するが、同時に『トランスフォーマー』シリーズのような現実にはありえない巨大ロボットも登場！あれれ、本作は一体ナニ？

＜冒頭のロボットの戦いにビックリ！＞

ロシア映画は『ナイト・ウォッチ』（04年）、『デイ・ウォッチ』（07年）によって新しい斬新な映像美を開発したそうだが、私の評論はイマイチだった（『シネマルーム10』86頁、『シネマルーム18』342頁参照）。しかし、本作冒頭にはその流れを受け継いだうえ（？）、クセーニアのかわいい一人息子チョーマ（アルチョム・ファジェエフ）とその「守り神」のような正義のロボットと、猛獣にも変身する邪悪な巨大ロボットとの戦いが展開するが、さてこれは現実？それとも・・・？

＜ちょっと、動機において不純だったが・・・＞

泥沼化する日中戦争を打開するために、「対米英戦争」に踏み切らざるをえなかった。それが当時の日本のリーダーたちの説明だったが、果たして国民はその点についてどれくらい理解していたの？チョーマは離婚した夫ザウル（エゴール・ペロエフ）との間に生まれたクセーニアの一人息子だが、彼女は今チョーマにエリート銀行マンの新しい恋人エゴール（アレクサンドル・オレシコ）を父親として認めてもらおうと必死になっていた。

そんな女心は一徹だから、今は南オセチアのシダモンタ村で平和維持軍の任務についている元夫のザウルが、「息子のチョーマをシダモンタ村の自然の中で過ごさせてやりたいから連れてくるように」と言われると、これ幸いにチョーマだけザウルのもとに行かせ、自分は恋人のエゴールと2人でバカンスを満喫しようと考えたのは当然？たしかにそうも言えなくはないが、客観的に考えれば、これはちょっと、動機において不純なのでは・・・？

＜「8月戦争」ではなく、人間ドラマがメイン！＞

そこで問題は、ザウルが今赴任しているシダモンタ村はグルジアとの国境近くにあり、いつグルジア軍が侵攻してくるかもしれない危険地帯だということだ。しかし、「いつ戦争が始まる」などという国家機密を一般市民や一兵士が知る由もないのは、かつての日本と同じだ。そこで、クセーニアはチョーマを一人だけでザウルのもとに送り出したが、その直後に彼女のもとに飛び込んできたニュースは「オセチアにグルジア軍が侵攻してきた。戦争が始まった」ということ。こりゃ、えらいこっちゃ！

クセーニアはザウルに電話を入れ、「いますぐ、チョーマを返して！」と叫んだが、さて現地の一般兵士にグルジア軍侵攻の情報が伝わるのはいつ？突然のグルジア軍侵攻の前にシダモンタ村は一気に蹂躪され、チョーマは危険な立場に置かれたが、これは1939年9月1日のナチス・ドイツによるポーランド侵攻と同じ？それはともかく、チョーマを取り戻すべく南オセチアに乗り込み、「8月戦争」の最前線に否応なく放り出された愛する息子チョーマを救出すために、クセーニアはいかなる奮闘を？本作はそれを描く人間ドラマがメインで、「8月戦争」そのものを描くのが目的ではないから、くれぐれもご注意を。

＜やはり、母親の愛の力が最強！＞

本作中盤から後半、そしてクライマックスにかけては、美人女優スベトラナ・イヴァーノヴナのミニワンピース姿から軍服姿（？）までのさまざまなファッションと、無鉄砲ながらいつもどこかで誰かが助けてくれる状況設定の下で発揮させるクセーニアの、とんでもないウーマンパワーぶりが本作の見どころになる。

クセーニアの元夫ザウルがあっけなく死んでしまった後、一人でおじいちゃんの家の中に隠れて救いを待っていたチョーマの頼りは一本のケータイのみだが、実はチョーマには呪文を唱えればすぐに駆けつけてくる大好きなロボットの応援も・・・？それはそれでOKだが、やはりクセーニアが見せる、母親の愛の力が最強！

＜ひょっとして、戦場に咲く新しい恋も・・・？＞

ジェシカ・チャスティンが第85回アカデミー賞主演女優賞を受賞した『ゼロ・ダーク・サーティ』（12年）では、アメリカのネイビーシールズによるビンラディン捕縛作戦の全貌がリアルに描かれていた（『シネマルーム30』35頁参照）が、本作ではロシア軍の実力のほど（？）がよくわかる。とりわけ、シダモンタ村の近くまで辿り着きながら、多くのグルジア軍の戦車や狙撃兵が待ち受けているため容易にチョーマの元に駆けつけられないクセーニアを、献身的に援護する偵察部隊の指揮官リョーハ（マクシム・マトヴェエフ）の活躍に注目！

銃弾が降り注ぐ激戦地帯の中を、クセーニアが鉄兜をかぶった勇猛果敢な姿で駆け抜けることができたのはひとえにリョーハの的確な作戦指示があったためだが、ひょっとしてリョーハの心の中には別の感情も・・・？そして予想されるとおりの筋書き（？）を経て、無事チョーマはクセーニアの手によって救出されることになるのだが、そのことを知ったリョーハとクセーニアとの間にはひょっとして、戦場に咲く新しい恋も・・・？